

「差別」って、何？私はこれまで「差別」とは、悪意を持って、傷つけようと相手に刃をむけるものだと思っていました。しかし、中学3年生になった今では、なんの悪意もなく、無自覚に相手を傷つけている差別もあると考えています。つまり、差別の意識がないということです。それは、私たちが思っている以上に恐ろしいことではないでしょうか。

「差別についてどう考えますか。」そう問われたときには「差別なんて自分には関係ない。差別をしたことも、されたこともないのだから。」今までの私だったら、きっとそう答えていたでしょう。ところで、皆さんは「差別」というものを身近に感じたことはありますか。中学一年生の時、先生はこうおっしゃいました。「無知は差別です。」と。なぜ、知識のないことが差別につながるのか、当時の私には理解ができませんでした。未だにこの言葉は、私の心に引っかかっている、その意味を考え続けています。今までの私は相手の見た目や第一印象に縛られて、その人自身を決めつけていました。「怖そう」「話しかけづらそう」目に見えるものばかりを追い求めて、その人の内面や本質というものから目をそらしていたのです。人と関わることが苦手な私は、新学期、慣れないクラスの雰囲気になんとも耐えられず、目の前にいるクラスメイトのことを知りたい、というワクワクよりも、自分の世界にいたいことに安心感を求めて、人と向き合うことから避けていました。それは、目に見えるものしか見てこなかった私の決めつけが自分自身に蓋をしていたからです。

今でも忘れられないのは、車椅子の女の子との出会いです。私はこれまで何の不自自由もなく、健常者として生きてきました。だから、初めて彼女を見たとき、自分とは違った存在が珍しく思えたと同時に、「かわいそう」という言葉が脳裏に浮かびました。毎日の生活は大変だろうし、上手く走ることもできないだろう。きっと、不自自由なことばかりなのではないだろうか。そんなマイナスなイメージばかりをもち、彼女を知ろうともしないまま、そんな偏見が私の心に根を張り、いつのまにかそういう人なのだという認識に変わっていったのです。しばらくして、私は初めて彼女と話をしました。思いがけない偶然が、彼女を知るチャンスを与えてくれたのです。そのとき初めて挨拶をしました。思っていたよりも緊張してしまい、心臓がバクバクと音をたてていたのを今でもよく覚えています。そんな私に、「こんにちは」と笑顔を返してくれた彼女は、話してみるととても心優しく、他人を気遣える普通の女の子でした。ただ、車椅子で生活しているだけ。ただそれだけだったのです。私は今でも後悔しています。彼女のことをなにも知らずともせずに、かわいそうだとはじめから決めつけていたことを……。彼女の一面だけを見て、個性を否定していました。そのことに気づいたとき、私は彼女について、「無知」だったことを自覚しました。彼女にとっては車椅子の生活が当たり前で、決してかわいそうなんかではなかったからです。私たちと同じように一生懸命に生きている、ただそれだけなのです。

この経験は、私の人生においてなくてはならないものだったと思います。「差別」に触れ、最も大切なのは自分の「無知」を自覚し、相手のことを知る努力をすることだと思えたからです。今振り返ると、車椅子の女の子のことを知ろうとしたことは今までも、これからも絶対に後悔はしません。今の私は、諦めていた当時の私に、自信を持って言えます。「知ろうとすることをやめないで。だって、知るべき人は今目の前にいるのだから。」私は無知を自覚することができて、心の底からよかったと思っています。自覚したから気づくことができた彼女の姿を、彼女自身を見つめることができたからです。

私たちはこれから先も、たくさんの人と出会い、関わりながら学ぶことでしょう。そんなひとつひとつの出会いを大切にするために、今知るべきです。相手を同じ角度からばかり見ていては、その人の本質を知ることにはできないのです。だから私たちは対話を重ねなければなりません。他人を知らなければなりません。「無知」がいつか「差別」にならないために……。私たちが生きるこの世界は、「無知」で溢れています。その「無知」のすべてを知ることには、難しいかもしれません。しかし、せめて身近にいる大切な人たちを守り、傷つけないために私はたくさんの人に知ってほしいです。「無知は差別」それが差別をなくすための一歩だということを……。